

閉会の言葉

梅原利夫

どうも皆さん、お疲れ様でした。皆さんとともに、このシンポジウムの意味というものを確認しあいたいと思います。

今日は、いろんな話が出ましたけど、私はずっと聞いていて、一つの軸は、「保育における対話とコミュニケーション」だったと思います。しかもそれは言葉だけではなくて、対話の質、コミュニケーションの質というものが、非常に問われている。その質を、それぞれ三者の方が、それぞれの実践に即してお話くださったと思います。

私の専門は、小学校・中学校の学校教育の学習や授業になります。その専門から今日のお話を聞いていて、2つのことを考えました。

1つは、今日話された問題は、ほとんど全て、小学校・中学校で抱えている問題と、本質的に通じることであって、全然違和感がありませんでした。つまり、今日子ども達、青年達、あるいは日本社会の人間そのものが抱えている課題や、大事にしたい問題と突き刺さるかたちで保育のことが語られたという印象を持っています。非常に共感しながら聴かせていただきました。

それから2つ目は、このシンポジウムのテーマ「少子社会日本の保育」についてです。保育のことは実に現代社会の問題と非常に深く関わっている。「子どもやお年寄りを大事にしない社会・日本」というものが、告発されていると思うのです。実は、子どもやお年寄りを大事にしない社会というのは、その間に挟まれた青年や成人を含む、人間を大事にしない社会になっているかもしれないという告発であると感じました。

最近、どこかの国の大臣で「自分は2人の子どもを育てたので、義務を果たした」というような言い方をした人がいて、私は唾然としました。今日保育が問われているというのは、少子社会日本という社会だから問われているのではないと思います。今日のシンポジウムで感じたことですが、そこに子どもがいるから保育が問われているんだと思うのです。そこに子ども達がいるから、どういう保育の質を、どういうコミュニケーションと対話の質をつくらなければいけないのかというのが問われているのです。ここには対策的な発想で保育を考えるのか、それとも人間の一人として、子どもがいるから保育を考えるのか

という違いが、あるような気がいたします。

今日は、3人のパネリストから多様な問題提起がなされました。またお集まりくださった皆さん方からも、さまざまな意見や質問や感想が寄せられました。私どもはこれをしっかりとまとめて、今後、和光大学の財産として生かしていきたいと思います。

最後に、パネリストの方を始め、この会をつくってくださった学部の方、研究者の方、参加された皆さんに感謝いたします。どうもありがとうございました。

[和光大学現代人間学部学部長・心理教育学科教授]

付記：本稿は、2008年5月31日に行われたシンポジウム「少子社会日本の保育——いま求められている保育の質とは何か」の記録である。掲載にあたり、音声データを文字化したものを浅井幸子が修正したうえで、パネリストの先生および発言者の方に校正して頂いた。